

コミュニケーション能力を高める異学年合同体育授業の工夫 —— 学習形態・学習カードの工夫と言語活動を通して（全学年） ——

石垣市立名蔵中学校教諭 南 慎太郎

I テーマ設定理由

21世紀は、新しい知識、情報、技術が社会のあらゆる領域で重要度を増す「知識基盤社会」の時代といわれている。また、グローバル化も進み、価値観も多様化する中「生きる力」を育むことが重要になっている。中学校学習指導要領解説保健体育編（現行）では「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てること（中略）」と目標が掲げられている。体育分野における基本方針では「集团的活動や身体表現を通じてコミュニケーション能力を育成することや話し合い活動を通じて論理的思考力をはぐくむこと（中略）」を踏まえた上で、発達段階に応じて知識や能力を身につけさせるとしている。

また、中央教育審議会の答申（平成28年）によると保健体育科の目標の在り方において全国体力・運動能力、運動習慣等調査から運動に対する興味・関心は高くなっているとしている。しかし、「習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られる」と指摘している。こうした、中学生期の発育・発達の特性を考えると、運動の嫌いな生徒が増加するという傾向に保健体育の授業の在り方が大きな影響を与える。さらに、現代社会を取り巻く環境は、ゲームやインターネット、携帯電話等あらゆるメディアに囲まれており、人間同士のコミュニケーションが不足し、言語能力も低下していると考えられ、PISAの調査からも言語能力の低下が確認されている。

本校では小規模校のため、体育実技授業を一つの学年で実施することは集团的技能の目標を達成するには困難であり、異学年合同体育授業を実施している。これまでの授業実践を振り返ると、生徒たちが生涯にわたって取り組めるように、楽しさや喜びを味わわせることに重きを置いてきた。また、授業実践の中では、みんなで運動することの楽しさ、できる喜びを感じ取れるようになった。しかし、グループ学習やペア学習、学習カードにおいて、課題解決に必要な能力が求められるため、学習の振り返りや課題を解決する手立てとして学習形態や学習カードを工夫する必要があると考える。また、少人数の異学年合同体育授業において発達段階の大きな差や男女間、異学年間との交流が浅く、言語活動として場を設定するが話し合い活動に深まりがなく、形だけの場になっていることも課題である。このことから異学年におけるコミュニケーションが不足していると考える。そこで、日本コミュニケーション能力認定協会が定義している、コミュニケーション能力の4つの要素である、「聴く力・説明する力・質問する力・チームでの協調性」の育成が必要であると考えた。

本研究では、これまでの学習過程を踏まえ、一人一人の生徒が運動の楽しさや喜びを感じさせることに加え、達成感や成就感を味わうことのできる授業形態に工夫改善し、さらに、コミュニケーション能力を高めるためにも言語活動を充実させたいと考える。また、異学年合同の体育授業においてペア学習やグループ学習、教材・教具、学習カードを工夫しながら言語活動の充実を図る。そして、自らの課題を発見し、仲間と協力して練習方法などを工夫し、解決する過程を共有することで、日本コミュニケーション能力認定協会が定義している、コミュニケーション能力の4つの要素が高まると考える。

そこで、生徒の実態に応じて、授業の学習指導方法を工夫し、課題解決学習をする中で、言語活動の時間を取り入れ、運動の楽しさや喜びを体感し、達成感や成就感を味わうことで、保健体育の授業を通してコミュニケーション能力が高められると考え、本研究テーマを設定した。

〈研究仮説〉

異学年合同体育授業において、学習形態・学習カードの工夫と言語活動を通して、コミュニケーション能力の要素である、聴く力・説明する力・質問する力・チームでの協調性が育まれ、コミュニケーション能力が高まらるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 コミュニケーション能力について

コミュニケーション教育推進会議では、コミュニケーション能力について表1のように示している。また、コミュニケーション能力は、これからの時代を生きる子供たちにとっての基礎的な能力と考える。具体的に、学校において取り組むべき事項をコミュニケーション能力教育推進会議（文部科学省）は以下の様に捉えている（表2）。

このことから、コミュニケーション能力を育むことは色々な価値観の持つ集団において、相互関係を深め、共感しながら人間関係を形成することが重要であると考え。また、対話の中で相手と意思の疎通を深めることも重要だと考える。その意思の疎通を深める手段として、コミュニケーションを高めるためにどのような力が必要であるかを明確にし、活動の場を意図的、計画的に設定する必要があると考える。

そこで、本研究では日本コミュニケーション能力認定協会が定義している、コミュニケーション能力の要素である、「聴く力・説明する力・質問する力・チームでの協調性」を必要とされる力とし、意図的、計画的に設定する必要があると考える（図1）。

(1) 聴く力

鷺田清一（1999）は、「〈聴く力〉というのは何もしないで耳を傾けるという単純に受動的な行為ではない。それは語る側からすれば、聴くことばを受け止めてもらったという、確かな出来事である」と捉えている。聴くことに関しては、誰もが幼小の頃から指導を受けている。聴く態度、姿勢が相手の説明を受け入れ、理解する力が求められると考える。

日本コミュニケーション能力認定協会では、相手の悩み等を聴いてあげることで、「相手の気持ちを汲み取ること」、「相手を尊重すること」を意識することが、より恵まれた人間関係を築く一番の近道だと示している。

保健体育では、授業のゲーム時における作戦タイムの中で、相手の伝えていることを理解できているかによって、ゲームの展開も変わってくる。聴く力は、自分とは異なる他者を認識し、受け止めること、理解することがコミュニケーションを高める重要な力と考える。

(2) 説明する力

相手に合わせた言葉や表現方法で分かりやすく伝えることで意思の疎通ができる。よく耳にすることがあるが、「伝えたけど、伝わっていない」これがトラブルの原因になることもある。これは、相手に伝わる力が欠けていることや相手の聴く力にも原因があると考え。

日本コミュニケーション能力認定協会では、グループディスカッションに関して「良いアイデアでも、伝わらなければ実現しない。的確に意見を伝える説明する力が必要」と示している。

保健体育にも、授業におけるゲームや、作戦タイム、発表時などに説明する力が求められる。自分の考えや気持ちを相手に上手に表現することや、相手の気持ちになってその表現を工夫する力も必要になると考える。

(3) 質問する力

日本コミュニケーション能力認定協会によると、「メンバーの意見やアイデアが理解できなくて次の発言ができない。ポイントを明確にするためには効果的な質問が必要」と示している。

このことから、質問するという事は、何かしら疑問を抱いたときに自分との意見を照らし合わせる事。自分の頭で考えを整理しながら追求し、自らの意見から相手に対する質問を導き出す力が必要だと考える。

実技授業において、「ルールややり方がわからない」専門用語などがわからない等の生徒もたくさんおり、理解できないことやわからないことに対して、質問する力が要求される。自分の意見を述べると言うことは、他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考することに繋がると考える。

表1 コミュニケーション能力
(コミュニケーション教育推進会議)

- ①国際社会を生き抜く異文化コミュニケーション能力。
- ②社会に出てから最初に直面する世代間コミュニケーションの問題を克服する能力。
- ③楽しい学校生活を送るために、いじめやキレるという現象をできる限り少なくするような人間関係を形成していく能力。

表2 コミュニケーション能力を学校教育において育むためには
(コミュニケーション教育推進会議)

- ①自分と異なる他者を認識し、理解すること。
- ②他者認識を通じて自己の存在を見つめ、思考すること。
- ③集団を形成し、他者との協賛、協働が図られる活動を行うこと。
- ④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと。

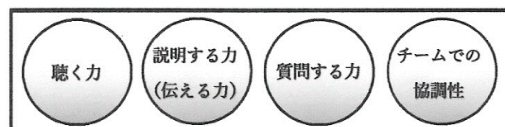


図1 コミュニケーション能力4つの要素
(コミュニケーション能力認定協会)

(4) チームでの協調性

日本コミュニケーション能力認定協会によると「役割に不向きな人、困っている人がいたら、自分にできるサポートは何かを探すことも大切なチームへの貢献」と示している。

実技授業においては、ゲームや練習の活動が中心となる。チームやグループにおいてはメンバー同士の相互作用を促し、お互いの強みや弱みを補完し合いながら、個人では実現できない成果を生み出すことだと考え、協調性やチームワークに優れた生徒が求められる。そのために、ゲームにおけるグループを編成し、集団を形成することで、他者との交流や経験を積み重ね、他者との協調、協働が図られると考える。

本研究では、これまでの4つの要素をコミュニケーション能力として考え、この要素が高まることで相手の言いたいことを理解し、相手の言葉足らずの表現も読み取り、自分の意見が受け入れられていると感じることができる。さらに人間関係においては、信頼関係を築くことができ、コミュニケーション能力の高まりへと発展していくと考える。

2 言語活動の充実について

現行学習指導要領において、体育分野では、「相手や仲間のよい演技に賞賛を送る、互いのよい演技を認め合う、互いに教え合うなどのコミュニケーションを図る学習活動を充実する」としている。

つまり相手の気持ちを思いやり、互いに理解しようとする考えを持ち、互いに学びあうことが人間同士の対話から生まれるコミュニケーション能力を高めることだと考える。

そこで、言語活動に必要な「対話」ということばにも着目して考えていきたい。体育における対話的な学びとは、佐藤学(2000)によれば「対象との対話的实践においては『運動の文化的価値への参加』を意味し、『運動の中心のおもしろさ』として位置づけ、文化的に価値の高い経験を組織する状況づくりが重要。また、自己との対話的实践においては『自己の身体との対話』を意味し、『わざの形成』を実感することができる内容づくりが重要。さらに他者との対話的实践においては『仲間との質の高い課題への探求』を意味し、平等と質の同時追求ができる課題づくりが重要」と述べている(図2)。この定義から、対話的な学びは、ものとの関わり、他者との関わり、自分自身との関わり(対話)の中で、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」と言うことになる。

これらを踏まえ、対話的な学びを三位一体の場面で設定し、生徒同士の対話的な学びから、自然に励まし合い、教え合う活動場面が育まれ、場の設定をすることで、生徒同士の関わり方に変化が生じ、互いに合意形成することで、コミュニケーションが高まり、課題解決学習へと繋がると考える。

3 学習形態について

単元の特性を踏まえた指導方法や生徒の技能の発達段階に応じて、ひとつの学習形態のみで体育の授業を進めることは難しい。教師が全体に指導すべき安全面に関する事項や、授業始めの各単元種目におけるドリル学習(スキルアップ)における内容や技術ポイント等の説明については一斉学習の学習形態の方が一般的であるが、ゲームや練習が始まれば、グループ学習で進められることが必要になってくる。そこで、ペア学習、グループ学習を取り入れ、学習形態を工夫して取り組むこととする。

(1) グループ学習

体育の授業におけるグループ学習について、佐藤善人(2015)によれば「能力や性別、年齢の異なる集団を小集団化し、授業を展開することでグループ内の教え合いや学び合いといったコミュニケーションを大切にしているところにある。」と捉えている。

しかし、小規模校(異学年合同体育)においては、リーダー(上級学年)の意見のみが反映され一方的な進め方になり、対話の中にも深まりがないことがある。このような状況にならないように、生徒たちが納得するような人間関係、技能、性格、男女間等を考慮し、グループ編成づくりが必要になってくる。このようにグループ編成づくりを工夫することにより、小規模校におけるグループ学習は様々な能力、価値観をもった生徒が教え合い、学び合う活動として、効果的な学習形態と考える。

(2) ペア学習

成田國英(1999)によれば「友人との自由な会話や遊びを通して、相手が何を考えているのか、

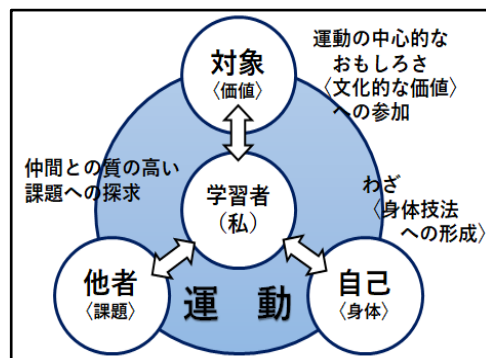


図2「体育における対話的な学び」三位一体(佐藤2000)

自分に期待していることは何なのかを察知することもできる。時には友人を援助したり、協力し合って活動する等の心構えを学ぶ。」と述べている。ペア学習で学んでいくことは、学習過程の中で自分の言動や態度が相手から受容されたり、時には拒否されたりすることもある。相手との付き合い方を知り、友人間で守るべきルールを習得していく。その経験が対人関係の結び方や相手に対する心遣いの基盤となるものを身につけていくと考える。以上のことから、ペア学習においてもグループ学習の編成と同様に、互いに意見を伝え合うことができるように工夫していきたいと考える。

4 学習カードについて

保健体育の学習カードの効果としては、一人一人の学びの足跡が残せることができ、教師が観察しきれない子どもの気持ちの変容や変化、さらに技能の高まりなどが見て取れる良さがある。

まず、学習カードの活用の手立てとして、前述のように生徒たちの変容を見取る手段や評価として用いる。本研究では、個人の学習カードはもちろんだが、グループにおける学習カードも工夫改善することで、コミュニケーションを高める有効な手段として活用することとする。

名古屋市体育研究会によると、学級の実態や指導者の指導意図に応じて、表3のような4つの内容のカードを示している。

表3 指導意図に応じた学習カード（名古屋市体育研究会）

- | |
|--|
| 1 情報カード・学習情報・資料の提供を主眼とし、自分の高まりが残せる |
| 2 技能カード・タイムや距離、ゲーム記録等技能の高まりを中心に残せる。 |
| 3 態度カード・関心・意欲・態度の観点を中心に感情・意思の変化や社会的態度の高まりを残せる。 |
| 4 思考カード・思考・判断の観点を中心に、どのような課題を設定し、どのような解決の過程で作戦や動きを工夫したかが残せる。 |

本研究では表3の4つのカード内容を参考に、各時間において適した内容を取り入れ、学習活動に沿った形式で作成することとする。また、運動時間の確保を優先し、カードに記入する作業が多すぎないように、負担のないような授業の展開を工夫する。上記の4つの内容をコミュニケーション能力の必要とされる4つの要素と関連づけ、カードの中にその高まりが感じ取れる学習カードの形式を作成することとし、多面的な観点からコミュニケーション能力の高まりへと繋がると考える。

5 異学年における合同授業について

異学年学習は小規模校においては、色々な行事等で効果を発揮する。例えば、小中併置校において運動会では、紅白に分かれて行い、勝利を目指して上級生がリーダーシップを発揮する。その姿を見て下級生はリーダーの役割を学ぶ。他にも、社会に出て行う文化的活動は運動に限らず異学年で行うことが多い。生涯スポーツを育むひとつの方法としても異学年の学習のあり方は効果的だと考える。

成田（1999）によれば、「学習意欲のない子どもたちが集団の雰囲気引き込まれて、知らぬ間に積極的に学習を展開するようになる。個人と友人を大切にしようとする集団は、教育活動としてのよい授業を支え、高め合う集団と言えるのであり、そのような集団がもつ雰囲気やそこからにじみ出る力は、子どもの教育上に計り知れない成果をもたらすことになる」と示している。このことから、異学年の合同体育授業の良さを生かし、学習形態を進める中で、他者との協調、協働が図られる活動を行うことでコミュニケーション能力が高まると考える。

III 指導の実際

1 単元名 球技 ゴール型 「 バスケットボール 」

2 単元目標

- (1) バスケットボールの特性に関心を持ち、自己やチームの課題解決に向けて、仲間と協力して積極的に取り組み、作戦や話し合いに参加できる。 (全学年) 【関心・意欲・態度】
- (2) 自己やチームの課題を明らかにし、能力に応じた計画を立て、課題解決に向けて練習や作戦を工夫することができる。 (全学年) 【思考・判断】
- (3) ①ドリブル、パス、シュートなどバスケットボールの基本的技術を習得し、ゲームで実践できる。 (1・2学年) 【技能】
 - ②自己やチームの能力に応じた課題の練習やゲームを通して、集団的技能や個人的技能を高めることができる。 (3学年) 【技能】
- (4) ①ルールを理解し安全面に留意して練習やゲームができる。 (1・2学年) 【知識・理解】
 - ②ゲームの運営に必要な集団的・個人的な技能の基礎的知識を学び、理解できる。 (3学年) 【知識・理解】

3 単元の評価規準

	I 運動への関心・意欲・態度	II 運動についての思考・判断	III 運動の技能	IV 運動についての知識・理解
単元の評価	・バスケットボールの特性に関心をもち楽しさや喜びが味わえるように進んで取り組もうとする。 ・チームにおける自分の役割を自覚して、その責任を果たし、互いに協力して練習やゲームをしようとするとともに、勝敗に対して公正な態度をとろうとする。 ・練習場などの安全を確かめ、健康・安全に留意して練習やゲームをしようとする。	チームの課題や自分の能力に適した課題の解決を目指してルールを工夫したり作戦を立てたりして練習の仕方やゲームの仕方を工夫している。	球技種目の特性に応じた基本的技能を身につけ、作戦を生かした攻防を展開してゲームができる。	球技種目の特性や学び方、技術の構造、合理的な練習の仕方を理解するとともに競技や審判の方法を理解し、知識を身につけている。
学習活動に即した評価	①バスケットボールの学習に自主的に取り組もうとしている。 ②作戦などの話し合いに貢献し、球技の楽しさや喜びを味わおうとする。 ③自己の責任を果たし、互い協力し、助け合い教え合おうとしている。 ④練習やゲームでフェアプレイを大切にしようとし、健康・安全に留意しようとする。	①チームや自分の課題に応じた適切な課題を設定している。 ②仲間に対して技術的な課題や有効な練習方法について指摘している。 ③チーム内の話し合いにおいて自分の考えを述べ、適切な関わり方見つけている	①ボールをコントロールしたパス、ドリブル、フェイント、フットワークができる。 ②フリーでパスを受けることができ、シュートを放ち、ゴールチャンスを生み出すことができる。 ③練習やゲームにおいて、マンツーマンディフェンスやゾーンディフェンスの動きができる。	①練習の目的や行い方について理解したことを言ったり、書き出したりしている。 ②観察記録を行いその結果について理解したことを言ったり、書きだしたりしている。 ③試合の行い方やルールを理解し、審判の方法を身につけている。

4 単元の指導計画と評価計画（10 時間）

時間	学習内容・学習活動	支援の内容 ・ 留意点	学習活動に即した評価基準				
			I	II	III	IV	方法
50 × 1	◇オリエンテーション ①単元の特性やねらいを理解する。 ②授業の進め方、ペア、グループ編成 ③学習カード等の活用方法について ④評価方法について理解する。	・学習の進め方、内容について理解させる。 ・用具の使用方法やセッティングの仕方 ・バスケットボールの特性を知らせる。 ・基本的なボール操作の練習を効率よく進めさせる。 ・偏りのないグループ（ペア）の編成 ・ドリル学習の説明	① ↑		① ↑		学習カード ・ 観察
50 × 2	【ねらい 1】 自分の技能の課題を設定しながら、ボール操作を習得し、互いに協力し、教え合ったりしてゲームを楽しむ。 ◇個人的技能の練習（ペア学習） ①用具や活動場所の確認 ②準備運動（W-up）筋力トレ ③出席点呼・健康観察 ④ねらいの確認（授業の流れ） ⑤学習カードの記入（ペアめあて設定） ⑥ドリル学習（基礎・基本動作） ⑦技能的学習活動 ・速攻の練習・マンツーマンディフェンス等 ⑧作戦・ミーティング ⑨ミニゲーム ⑩まとめ・発表	・用具の準備、活動場所の安全を留意させる。 ・自己の能力、適性、チームの現状を把握する。課題発見 ・めあての設定では、話し合いの活動に全員が参加できるように指導する。 ・基本的技能を身につけるとともに効果的な練習の仕方が身につくように指導する。 ・グループの仲間と協力して取り組めるように指導する。 ・勝敗に対して、公正な態度をとり、協力して、練習やゲームをしているか確認する。 ・自分の反省がまとめられるように指導する。	① ↓	①	① ↓	①	
50 × 3	【ねらい 2】 個人的技能を生かし、速攻を中心としたゲームを展開し、作戦を立て、仲間と協力して集団的 技能を高め、ゲームを楽しむ。 ◇集団的技能の練習 ①準備運動（W-up）筋力トレ ②出席点呼・健康観察 ③ねらいの確認（授業の流れ） ④学習カードの記入 ⑤ドリル学習（基礎・基本動作） ⑥技能的学習活動 ・セットオフENSEを意識した練習等 ⑦ミーティング・作戦 ⑧ミニゲーム オールコート3対3 ⑨まとめ・発表	・自分の課題、チームでの課題を設定し、リーダーを中心に課題に応じた練習 を取り組ませる。 ・これまで反省からチームの練習計画や練習方法（速攻）に改善を加えながら 学習を進めさせる。 ・教えあい、励まし合いながら練習、ゲームができるようにする。 ・速攻、セットオフENSEを意識した練習やゲームに取り組めるよう に指導する。 ・話し合い活動においては、自分の意見を伝え、相手の意見も受け 入れ、尊重できるような指導をする。 ・勝敗に対して、公正な態度をとり、協力して、練習やゲームをし ているか確認する。	② ↑ ② ↓		② ↑ ② ↓	②	
50 × 3	【ねらい 3】 高まった技能を生かし、相手チームに応じた作戦を立て、攻撃、守備の連携プレー を高め、ゲームを楽しむ。 ◇集団的技能の練習 ①ドリル学習（W-up）筋力トレ ②出席点呼・健康観察 ③ねらいの確認（授業の流れ） ④学習カードの記入 ⑤技能的学習活動 ・オールコート4対4（ミニゲーム） ⑥ミーティング・作戦	・用具の準備、活動場所の安全に留意させる。 ・自分の課題、チームでの課題を設定し、リーダーを中心に課題に応じた練習 を取り組ませる。 ・仲間と協力し、考え、教え合いながら課題の解決に向けた方法 を見つける。 ・相手チームの特徴に応じた、作戦を立てられるようにする。 ・高まった技能を生かし、チームの特徴を生かすようにする。 ・既習の技能を生かした練習やゲームに取り組めるようにする。	③ ↑ ③ ↓	② ↓ ③	③ ↑ ③ ↓	③	
50							

×	⑦ゲーム(正規のルールに近い) ⑧まとめ・発表	・学習カードを参考にしながら、これまでの学習を振り替えさせる。 ・学習全体のまとめをさせる。(10/10)	④				
---	----------------------------	--	---	--	--	--	--

5 本時の指導 (7/10)

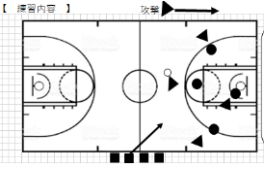
(1) 単元のねらい

ねらい3・・・高まった技能を生かし、相手チームに応じた作戦を立て、攻撃守備の連携プレー(本時)を高めゲームを楽しむ。

(2) 授業の仮説

- ① ミーティングや作戦では、対話的活動が深まり、仲間との協調性やグループでの所属感が高まり球技の楽しさや喜びを味わうことができるであろう。
- ② 集団的技能を練習することによって、グループや個人の課題を見つけ、互いに教え合い、学び合うことで技能や知識が高まるだろう。
- ③ 学習カードを活用することにより、自分の意見や相手の主張も聴くことができ、互いの意見を尊重し合い、認め合うことで、協調性も高まり、コミュニケーションの高まりへと繋がるであろう。

(3) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	1. 準備運動(腹筋・背筋・腕立て等) ドリル練習 ※グループノート参照 ①リング下からジャンプシュート ②1対1を想定してのドリブルからのレイアップシュート ③ミドルからのジャンプシュート ④ドリブル(スラローム)からレイアップシュート ⑤ミドルからのジャンプシュート 2. 集合、挨拶、出席確認、健康観察 3. ねらいの確認 ○本時の学習の目標と流れの確認 ○各グループ・個人のめあての設定(個人カード) ○グループによる言語活動(グループカード) ○各グループのめあて発表(質問タイム)	・速やかに準備させる。(各グループ役割分担) ・安全面に留意して取り組めるようにする。 ・基本的な動きが習得されているか確認し、手立てが必要な生徒への助言を行う。 (ドリブル、ジャンプシュート、レイアップシュート) ・本時の授業の流れとねらいを確認する。 ・各個人のめあての設定の確認(練習の中で工夫する事を意識させる) ・各グループのめあての設定の確認。 ・グループ活動(言語活動)の時は、進行役を設定するように伝える。	
ねらい3: 高まった技能を生かし、相手チームに応じた作戦を立て、攻撃守備の連携プレーを高めゲームを楽しむ。			
展開 33分	4. 勝ち残りミニゲーム 3対3 (4対4) ・オールコート(8分) 学習内容  5. ミーティング (3分) 次の練習への確認 ペア・グループによる言語活動 ※ペアボードに記入 6. ミニゲーム(正規のルールに近い) 4対4 総当たり戦(15分) ※6分ゲーム×3	・チーム内で教え合い、励まし合って協力して練習に取り組ませる。 ・作戦ボードを上手に利用するように支援する。 ・練習内容の趣旨及び、どの局面かを理解させる。 ・ペアボードに記入し、自分の意見を述べさせる。 ・既習の技能の練習を生かせるようにし、作戦をしっかり立てているか確認する。 ・言語活動時は作戦ボード、視覚資料を利用させる。 ・4対4では速攻やマンツーマンディフェンスを意識したゲームを展開させる。 ・各チームの確認のもと、苦手な生徒に対しての特別ルールを設けたりする。	Ⅲ③ (観察) Ⅳ③ (観察) (カード)
まとめ 7分	7. 本時の反省 (ペア・グループ活動) ・チームや個人の反省と評価を行う。 ①個人で本時の反省を考える(個人カード) ②グループの反省をまとめる(グループカード) ・チームや個人の課題を確認する。 8. 発表・各グループ発表 (質問タイム) 9. 本時のまとめと次時の確認 挨拶(号令)、片付け	・課題練習の成果がゲームの中で、十分に発揮できたかを評価させる。 ・発表の仕方にも「今日のめあてに対して、私たちのグループは・・・(課題)・・・に手立てとして・・・どのような取り組みをして・・・どんな結果が得られたのか」を具体的に述べる指導を行う。 ・ゲームの結果と各チームの課題を聞き、次時の練習方法等を助言する。 ・相手の質問を聴く態度を心がけ、質問する内容も考えさせる。	

6 仮説の検証

研究仮説に基づき、お互いに教え合い学び合う言語活動の充実と対話的な学び合いが深まるように、学習形態・学習カードを工夫しながら取り組んだ。これらの手立てからコミュニケーション能力の高まりについて検証する。検証方法として、学習カード、会話の内容、生徒の記入したボードの内容等を含め、検証前後のアンケート結果の変容と感想をもとに検証していく。

(1) 言語活動の充実について

① 共通した課題の設定

言語活動の場をたくさん取り入れる環境にする事で、対話が弾み、そこから教え合い、学び合いへの活動が高まると考え、ペア同士の共通の課題として「めあて」(写真1)を設定した。最初の段階は、グループの中でも好きな者同士をペアにすることで、スムーズに会話が弾み、お互いの意見を尊重し、意見を交換できるようになり、めあてを設定できるようになった。授業後の感想からも、「話し合いをペアでする事によって、意見をたくさん出すことができたので良かったです。」とあり、お互いの学び合いが深まったと捉えられる。

また、授業の中盤からのめあての設定に関しては、グループ学習を中心とした活動に位置づけた。後輩からも自分の意見を述べるができる様になり、ペア学習で培った対話する力が身につく、グループ学習でも発揮されるようになった。

このことから、ペアやグループでの交流や言語活動の場を設定することで、相手に合わせた言葉や表現方法で分かりやすく伝え、意思の疎通ができるようになり、説明する力が高まったと考える(写真2)。さらに、縦割りのグループで編成したことで、異学年との交流が深まったことが伺える。

② マニュアルを用いた発表の設定

導入とまとめの時間に自分の考えを説明する力が身につくと考え、各グループから代表1人に発表の機会を設けた。最初の段階では、みんなの前で発表する事に抵抗があり、早く終わらせようと内容の薄い発表に終わっていた。そこで、表4のような発表の仕方のマニュアルを提示することで、発表の内容も深まり、より具体的に自分の考えを上手に表現できるようになった。検証後の意識調査からも「あなたは意見を発表することが好きですか」という設問に対して、肯定的に答えようとする生徒が検証前から比較すると71%(10名)から93%(13名)と増加した(図3)。また、授業後の感想からも「私は今までは発表するのは面倒くさくて嫌だったが、授業では、お互いにわからない事を質問し合い、理解することが楽しくなり、発表も好きになりました。」と記述されており、理解することで学び合いの気持ちが高まり、発表することで表現力も高まったと考えられる。このように、相手に伝わりやすい発表の仕方を理解することで、自信を持って発表を行うことができ、自分の考えを整理し具体的に説明する力が高まったと考えられる。

③ 質問タイムの設定

自分自身で解決できない課題に対して、意図的に質問する機会として「質問タイム」を設定した。検証後の意識調査から「わからないことを質問できますか」という設問では、肯定的に答えた生徒が検証前と比較すると57%(8名)から85%(12名)と大幅に増加した(図4)。また、図5の生徒の感想からもわからないことを質問する事で、学ぶ意欲が高まり、対話的な学びへと繋がったと伺える。

このことから、意図的に質問する場を設定し、異学年間での質問をやりとりすることで、自ら解決する過程を導き出すことができ、質問する力が高まったと考えられる。



写真1 ペアでめあてを設定

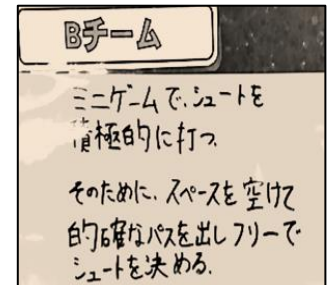


写真2 めあてを掲示

表4 発表の仕方(マニュアル)

【めあての発表】
例：私たちのグループは・・・な課題があるため、・・・な事に注意しながら・・・なところを工夫し、意識していきたいと思います。
()グループのめあては「・・・」です。
【まとめの発表】
例：私たちのグループは・・・な課題があったので・・・なところを意識して、練習に取り組みました。練習では・・・(課題点)や・・・(良かった点)がありました。次の授業では、・・・課題が見受けられたので・・・ところを意識して練習に取り組みで行きたいと思っています。さらに良かった点を・・・に伸ばして、知識・技能をのばして行きたいと思っています。
【質問の仕方】・・・相手が気持ち良く答えられるように質問する!
×例：先輩が言ったことが全く意味わからん。説明が下手なのでもう一回、教えてください。
○例：私は、先輩が言った・・・の言葉(説明)がよくわからなかったの、できればもっと詳しく教えてください。
○例：さっきの・・・な動きがわからなかったの、教えてください。
【説明の仕方】・・・相手が理解しやすいように細かく具体的に!
×例：「・・・」
○例：「・・・」

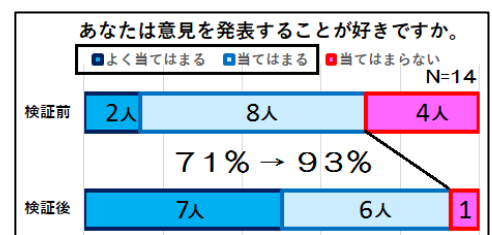


図3 検証後の意識調査(説明する力)

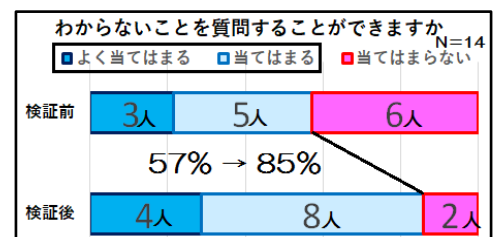


図4 検証後の意識調査(質問する力)

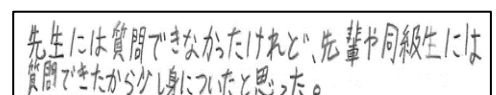


図5 授業後の生徒の記述

④ 作戦・ミーティングの設定

活動の振り返りや次の活動の対策として、作戦・ミーティングを設定した（写真3）。ゲームにおいて、相手チームに勝ちたいと言う気持ちが育まれ、「どんな作戦を立てれば勝てるのか」を考えるようになり、チームとして一つの目標に向けた課題を解決していく姿が見られた。会話の中にも「マンツーマンディフェンスの仕方や攻撃の時の動きにはスクリーンを活用することが効果的」というリーダーからのアドバイスもあり、作戦ボードを利用し、具体的に動きを想定する事で、対話が深まり、対話の中から生まれる専門的知識や用語も活用できるようになった。生徒の感想には、「作戦の中で、カバーディフェンスの仕方や相手の速攻を止める方法を教えて、上手く実践に活かすことができた。」とあり、専門的な用語や知識で後輩に教える様子や、チームの課題を解決する様子が伺え、言語活動が活発に行われたことが考えられる。また、活動の合間にも携帯用の作戦ボードを用い、チームの戦術や攻撃方法を確認するようになり、対話的な学び合いの深まりへと繋がった。この深まりから、教え合いや学び合いの中で、意思の疎通ができ、説明する力が高まったと考える。さらに、その説明を理解する事で、聴く力も高まったと考えられる。



写真3 作戦を立てている様子

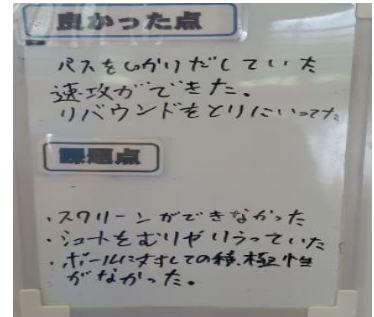


写真4 ペアボード

(2) 学習形態の工夫

① ペア学習での学び合い（ペアボード）

授業の最初の段階ではグループの中でも、ペア学習を取り入れ、次のステップとしてお互いに意見を尊重し、受け入れる体制を作ることとした。その手立てとして、活動の振り返りには、ペアボードを活用し、良かった点や課題点などを取り上げ、最後のまとめに結びつけられるようにした（写真4）。序々にペアボードに書く事で視野も広がり、表現も上手になった。授業後の感想から、図6のように他人からの意見を受け入れ、自己の課題に対して、振り返り、次の課題解決への意欲に繋がっている様子がうかがえる。また、検証後の意識調査からも「人の意見を聴き、受け入れ、理解できましたか」の設問に対し、肯定的に答えた生徒が100%（全員）に増加した（図7）。

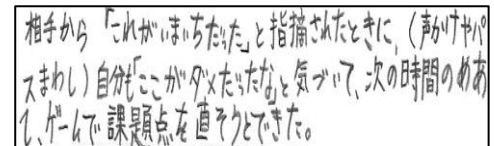


図6 授業後の生徒の記述

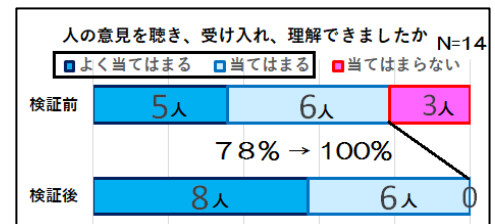


図7 検証後の意識調査（聴く力）

このことから、相手を認め合い受け入れる事で他者との協調、協働が図られ、お互いの聴く力が高まったと考える。また、ペア学習の回数を重ねる毎に、自分の主張を出そうという気持ちも高まり、誰とでも分け隔てなく会話する事ができるようになり、説明する力が高まったと考えられる。

② グループ学習での学び合い

グループ学習では、めあてや作戦等を決定することを目的とし、そこで言語活動の深まりへと繋げていくことにした。徐々に後輩に教えようと気持ちが高まり、3年生がリーダーシップを発揮するようになった。会話には、「スクリーンをかけるときは、体をしっかりブロックして押さえるんだよ」というアドバイスがあった。個人カードにも、図8のように、グループにおいて、教え合いの気持ちから、後輩に指示できるようめあてを設定するようになった。

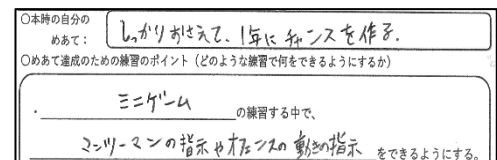


図8 積極的な教え合いの記述

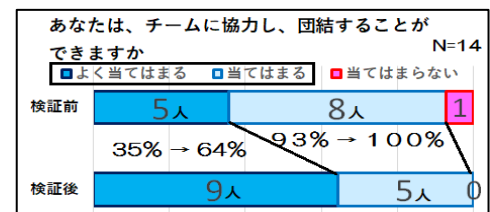


図9 検証後の意識調査（協調性）

また、生徒の感想からも「先輩がバスケットに関するテクニックを使った作戦を考え、実行できたので試合に勝つことができた。」と記述しており、作戦の中で対話が深まり、その作戦が成功する事で達成感や成就感が味わう事ができたと捉えることができる。また、検証後の意識調査から、「あなたは、チームに協力し、団結することができますか」という設問に対し、検証前では肯定的に答える生徒が高い数値を示しており、さらに「よく当てはまる」を見ると検証後には35%（5名）から64%（9名）と増加している（図9）。

このことから、異学年間でのグループでの学び合いが深まることで、チームにおける所属感が高まり、説明する力やチームでの協調性が高まったと考えられる。

(3) 学習カードについて

① グループカードの工夫

グループカードにおいては、みんなの意見をまとめる様な学習カードの形式を作成した(図10)。グループの共通のめあての設定や作戦内容を考えさせるための目的として様式を加えた。また、授業の活動内容を確認する事でスムーズな授業の展開や、機敏な動きができるようになった。他にも、作戦の内容を共通確認する事で、チームの団結力が高まり、実践的にゲームに生かされ、お互いの意見が反映されるようになり、対話的な学びへと発展したと考える。また、ゲームの結果やチーム内での評価、活躍した生徒を賞賛できるような様式も取り入れ、チームの話し合いで導き出すような様式の作成に心がけた。生徒の感想からも「グループカードは、味方と一緒に意見を出し合って、作戦を立てる事ができるので、とても良いと思う。また、MVPなど、良かった人を讃えるところもあってグループの良い点や課題点もみれて良いと思う。」とあり、グループでの対話的な学びから、作戦を立てることで思考力が高まり、友人を賞賛する様子も伺える。

図10 グループカード

このことから、互いに認め合い、助け合う気持ちやチームにおける所属感や自己肯定感も高まり、チームでの協調性が育まれたと考える。さらに、課題を解決する過程を共有する事で、発言する力や聴く力が高まり、グループの対話的な学びが深まったと考える。

② 個人カードの工夫

個人カードでは、めあてや授業で意識することや工夫したいことに狙いを示した。先輩からのアドバイスや攻撃、守備の専門的な知識を習得することで、関心や意欲も高まり、専門的用語を活用して具体的に表現できるようになり、説明する力が高まったと考える。

図11 授業後の生徒の記述

また、個人の感想や課題を教師が把握することで、より効果的なアドバイスを送ることができ、生徒、教師間とのコミュニケーションも図ることができたと考える。他にも、自己評価で自分を振り返ることができ、次時の課題設定や自己の課題を解決できる手立てとなった(図11)。

③ 振り返りカード

振り返りカードにおいては、聴いてわかったことやペアやチームに伝えたいこと、質問したいこと、チームへの貢献度として項目別に分け、毎時間、記入できるように作成した。質問タイムでは、前時でわからなかった事を振り返りカードを見ながら質問できるようになった。

図12 振り返りカードの記述

また、他者の意見を聴き、書くことで、理解力の向上にも繋がり、相手に伝えたい事も振り返る事で、表現力が育まれ、説明する力も高まったと考えられる(図12)。

(4) 異学年における合同授業について

これまでの授業実践から、少人数の異学年合同体育授業において発達段階の大きな差や男女間、異学年間の交流では、話し合い活動に深まりがないことが課題である。

この課題を踏まえ異学年間におけるペアやグループでの交流で、先輩からの教え合いや後輩の積極的な学びを通し、専門的な知識や技能の活用する場面が育まれ、コミュニケーションが高まり、異学年間の交流が深まったと考える。また、アンケート調査から「先輩や後輩から学ぶことはできましたか」という設問に対し、肯定的な意見が検証前は57%(8名)から検証後には86%(12名)と増加しており、高まっている姿が確認された。

このことから、合同体育授業における異学年間の活動に関して、積極的に学習に取り組み、お互いを支え合い、高め合う姿が見られた。

(5) コミュニケーション能力の高まり（意識調査等から）

アンケート調査より、「あなたはコミュニケーションがとれましたか」と言う設問に対し、検証後にはすべての生徒が肯定的に答えていることがわかる（図 13）。また、表 6 の検証後の感想からは 4 つ要素の視点で生徒達の意識の変容が見られた。

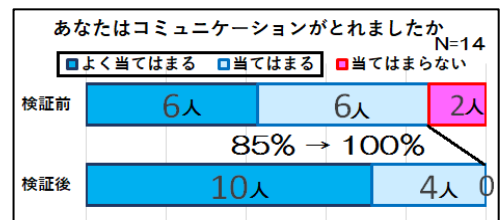


図 13 検証後の意識調査

表 6 検証後の意識調査

聴く力	- 相手の発表した事を取り入れて、めあてを立てることもできるようになった。それと同時に自分の意見も前より発表できるようになった。 - 自分の主張もしたけど、ペアの意見も聴いて、課題を設定する事ができた。 - 相手がどんな作戦を立てたのかを理解し、自分ならどうするかを考える事ができた。
説明する力	- 作戦などを話し合い、動き方がわからない人に上手く伝わった時にコミュニケーションが高まった。 - マニュアルを参考にしながら、今までは単語でしか説明できなかったけど、主語、述語をもつけて上手く説明できるようになった。
質問する力	- 話し合いの時に意見を積極的に出し、相手にどうすれば良いのか考えさせる事ができた。 - 小学校とは違って、バックパスやカットインなど知らない言葉が出てきたので、質問する場面が多くなった。 - バスケットをあまりしなかったことがなかったので、その分、疑問に思うことがあり、それをグループで質問する事ができて良かった。
協調性	- 試合中でもシュートを決めたら喜ぶ、外したら励まし合う等の助け合いの能力は高まったと思う。 - 作戦を立てたり、シュートを決めた後などは、話し合ったり、ハイタッチとか（盛り上がった）してコミュニケーション能力が高まりました。 - あまり、会話をしなかった先輩方とも楽しくコミュニケーションをとることができた。そして、ミニゲームの中でもコミュニケーションをとり、緊張をほぐす事ができた。

このように、生徒同士の対話的な学びから、自然に励まし合い、教え合う活動が育まれ、人間関係において、信頼関係を築くことができたと考ええる。

このことから、異学年合同体育の授業において共通の目標や意思を互いに理解し合い、認め合い、受け入れ、言語活動の充実や学習形態や学習カードを工夫する中で、発表や対話的な学びが繰り返し行われ、4つの要素が高まり、コミュニケーション能力が高まったと考えられる。

さらに、球技領域の目標である「基本的な技能や仲間と連携した動きを発展させて作戦に応じた技能（ボール操作）で仲間と連携しゲームを展開する」ことに対し、アンケート調査からも、「知識や技能の高まりはありましたか」という設問に対し、肯定的な意見が検証前には 64%（9 名）から検証後には 93%（13 名）と高い数値を示している。生徒の感想からも「マンツーマンディフェンスやスクリーンプレイなどの技能が高まり、バックパスやブロックなどのファールの知識が高まった」と述べている。生徒の活動からも、レイアップシュートやパスなどの個人的な技能の高まりや、チームプレーにおける集団的な技能も高まっている姿が見受けられた。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 異学年間や男女間における色々な価値観の持つ集団において、言語活動を繰り返す事で相互関係を深め、人間関係を形成し、意思の疎通ができコミュニケーション能力が高めることができた。
- (2) 学習形態・学習カードを工夫することにより、対話的な学びが深まり、お互いの良さを認め合う関係が築きあげられることで、4つの要素が高まりコミュニケーション能力が高まったと考える。
- (3) 学習形態を工夫することで、他者との交流を積み重ね、課題解決への取り組む姿勢が育まれ、専門的知識を活用し、繰り返し実践することで技能の向上にも繋がったと考える。

2 課題

- (1) 授業の進度や段階に応じて、項目の改善や精選をしながら、その単元の評価に即したカードの作成が必要と考える。
- (2) コミュニケーション能力を高めるために、対話的な学びや主体的な学びができるような工夫や場を設定し、言語活動を充実させていきたい。また、他の運動領域でも実践していきたい。

〈参考文献〉

- 岡野昇・佐藤学 2015 『体育における「学びの共同体」の実践と探求』 大修館書店
- 鈴木秀人・山本理人・佐藤善人・長見真・越川茂樹・小出高義 2015 『中学校・高校の体育授業づくり入門』 学文社
- 藤原久雄 2015 『すぐ使える！体育学習カード資料集 中学校編』 明治図書出版
- 目由紀宏 2015 『バスケットボール試合で勝つチームオフENSE』 実業之日本社
- 岩田靖 2012 『体育の教材を創る一運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』 大修館書店
- 文部科学省 2011 『言語活動の充実に関する指導事例集』
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領 保健体育編』 東山書房
- 成田國英 1999 『「生きる力」を育てる異年齢集団活動の展開』 明治図書出版
- 鷺田清一 1999 『「聴く」ことの力』 TBS ブリタニカ

〈参考URL〉

- 日本コミュニケーション認定協会
<http://www.ca-japan.org/about.html>
- 文部科学省 現行学習指導要領
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm
- 日本コミュニケーション推進会議：文部科学省
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1294477.htm
- 中央教育審議会答申平成 28 年 12 月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 単元 E 「バスケットボール」
<http://www.aichi-c.ed.jp/contents/taiiku/e1.pdf>